

『恋と愛の境界線』

著:遠野春日

ill:高久尚子

田坂管理官や刑事課長などといった上席者たちとのミーティングを終え、刑事部屋に戻ってきた隆伸は、パーティションで仕切られた休憩スペースから聞こえてくる話し声に、思わず耳を傾けた。

「おまえさー、やりにくくないか、あの警部補殿と組まされて？」

誰かがそんなふうにしたのだ。

見えないので誰なのかはわからない。以前はこの位置にパーティションなどなかったのだが、先週、庶務課から署内で余っていたものが回ってきたらしい。おかげでつつろぎやすくなったと評判である。

なにも本庁から出向してきている警部補は隆伸一人ではないが、「やりにくい」などという言葉が付くと、まず自分のことなんだろうな、と構えてしまうのは隆伸の小さい頃からの癖だ。

実際、話題に上がっているのは隆伸だった。

「いや。べつに」

次に答えた声が間違えようもなく輝明のものだったからだ。

「そうかあ？ ここだけの話、正直に言えよ、須田」

「正直も何も、俺は本当に藤堂さんと組んでやりにくいと感じたことなんか一度もないんだ」

聞いている隆伸の心臓は次第に鼓動を速めていく。

まさかこちら側に話題にされている当の本人がいるとは思ってもよらないだろう。刑事部屋には他に誰もいない。皆、捜査で出払っているのだ。輝明がここに残っているのは、隆伸を待っているためである。刑事は通常一人で行動することを禁じられている。輝明と話している相手はどうやら所轄の同期らしい。

「あの人さ、すごい変わり者なんだってさ。知ってるか？ 今は冬だから誰も何も思わないけど、真夏のどんな炎(えん)天(てん)下(か)でも、絶対肌を見せないできっちりとかッターシャツの襟を正しているとか。プライベートなことは同僚にも話さない完璧な秘密主義だとかさ」

「よせよ、村(むら)井(い)」

輝明が珍しく硬い声で止めたのだが、村井と呼びかけられた相手は「まあまあ」とかわして、この話題から離れたがらない様子だった。

「警察官になってまだ五年目だっなのに、犯人逮捕に貢献した実績が片手では足りないくらいある、ノンキャリア組期待の新星らしいんだが、そんなふうで、いかんせん上との折り合いもよなくて、いつも貧乏籤(くじ)引かされるらしい」

「なんだよ、それ。俺が貧乏籤だってわけか？」

「いや、そうじゃないけどさ、一般的に考えたら、やっぱ、刑事になりたてのペーペーを押しつけられて足(あし)枷(かせ)付けられたようなもんじゃないか」

「失敬なヤツだなあ」

そう言いながらも輝明は決して村井に怒ってはいないようだ。苦笑している顔が目
に浮かぶ。

隆伸は我ながら驚いた。

輝明と近い距離で付き合うようになってから、まだ一週間にしかない。それなの
に、この人見知りの激しい自分が、すっかり輝明には気持ちを許し、親しみすら感じて
いる。輝明の声を聞いただけで、今こんな表情だろうとまで想像できるとは、日頃相当
注意深く彼を見ていることにならないだろうか。相手に多大な興味がなければ、隆伸
は決してこうはならない。

本当なら、隆伸はこのまま踵(きびす)を返し、そっと部屋から出ていくべきだとわかっ
ていた。

すぐ向こうで自分の噂話をされているのだ。そういう話は聞かないほうがいいに決ま
っている。

わかっているながら足を動かさなかったのは、怖いもの見たさの好奇心が生じたから
だ。輝明が自分をどう見ているのか聞いてみたい。こういう話は本人と面と向かって
はなかなかできないものだが、このままここにいれば、偽りのない本心が聞けるかも
しれない。

聞きたい気持ちと、聞きたくない気持ち。

どちらも同じくらいあり、隆伸は咄(とつ)嗟(さ)に足を動かさなくなった。

自虐的なことには結構免疫がある。もし胸に痛い結果になっても、それはそれで割
り切れるだろう。——もし、輝明のことを特別に意識していなければ。隆伸としては、
何を聞いてもショックまでは受けないだろうという思い込みがあった。まだそこまで輝
明に気持ちを許しているつもりはない。

「藤堂さんは変わり者なんかじゃないよ」

隆伸がどっちつかずのまま逡(しゅん)巡(じゅん)しているところに、また輝明の声が
聞こえてくる。

不意を衝かれ、隆伸はまともに心臓を跳ね上げさせた。

「頭が切れすぎて周囲から浮いたり煙たがられたりするタイプかなとは思うけど、全然
嫌な人じゃない」

「だけど、いつも冷淡で皮肉っぽくて、掴み所くないか？」

「あれは俺が思うに、仮面なんだな」

「仮面？」

村井同様、隆伸も問い返したくなった。そっけない態度を取るのは自分の性格だと
思っていた。それを仮面などと評されたのは初めてだ。隆伸自身、素の自分がこれだ
と信じているのに、輝明には違って見えるのだろうか。

「うまく言えないけど。俺もそんなに藤堂さんのことを長く見てきたわけじゃないし。た
だ、ああいう一匹狼的な態度が本心でないのは確かだと思う。藤堂さんは……どちら
かという、寂しがり屋じゃないかな」

「あの人が寂しがり屋だなんて思うの、おまえだけじゃないかあ？」

村井は信じられないといった調子で言う。

「おまえ、あの綺麗な顔にちょっと騙(だま)されてんじゃないか？」

「よせよ」

輝明が迷惑そうに村井を押しとどめる。

「ここでそんな話はタブーだろ」

何がどう禁句なのか隆伸には今一つ掴めなかったが、村井が低い声で「悪い。ついで」と謝ったところからすると、二人にだけ通じる何かがあったのだろう。隆伸にはパーティションに隠れた二人の様子は見えない。身振りや手振り、顔つきなどでも情報を伝え合っているのかもしれない、それは隆伸にはまったくわからないことだった。

これ以上この場においては、廊下を通りかかった誰かに見(み)咎(とが)められるかもしれない。隆伸がここにいたことが知れたら、輝明と気まづくなる。それに何より隆伸は、思いがけず動揺している自分を悟り、もう限界だと思ったのだ。幸い今のところは傷つけられていないが、もし何か聞きたくない言葉が輝明の口から出れば、隆伸は最初考えたよりずっとショックを受けてしまいそうだった。

隆伸は忍び足で刑事部屋を出た。

少し時間をおいてまた戻ってくるのが一番いい。

時間つぶしに屋上に出る。

十一月もあと数日で終わってしまう。

屋上は寒かった。

本文 p43～47 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>